AACK 京都大学学士山岳会 No.43

Newsletter

November 2007

http://www.aack.or.jp

目次

崑崙山脈西部の山旅「六二三二m峰&六四六八m峰初登頂」
—二〇〇七年七～八月の記録—　芝田正樹……1
ジャマイカでの三年　安田隆彦……7
『大日岳の事故と事件』を巡って　斎藤清明……11
ブータン王国の新憲法　栗田靖之……13
南極OB会京都支部の創設と記念シンポジウムの報告　西山　孝……16
ムラカミさんへのメッセージ　平井一正・能田　成・横山宏太郎……17
図書紹介
「ヒマラヤの東　崗日嘎布山群—調査と探検史」
—書評と松本徑夫氏の紹介—　平井一正……20
「サトイモの絵本」　小西達夫……22
訂正……23
AACK海外登山・探検助成制度の案内……23
会員動向……24
編集後記……24

崑崙山脈西部の山旅「六二三二m峰&六四六八m峰初登頂」
—二〇〇七年七～八月の記録—

芝田正樹

二〇〇四年九月～一〇月（伊藤寿男らの偵察山行）、そして二〇〇五年七月～八月（伊藤らによる夢ムスターグ—六三四五m峰—初登頂）に続く、三度目の崑崙山脈西部の訪問となった。今回の山旅は「雲南懇話会」のフィールドワークと位置付けして実施された。

一、登山計画の概要

二〇〇五年七月、本会会員四名（L：伊藤寿男、SL：前田栄三、泉谷洋光、栗本俊和）は個人山行として崑崙山脈西部地域を訪れ、八月一日に無名の未踏峰（六三四五m）を全員で登頂した。

その山行の折、登路に用いた明るく開けた谷筋（以下、「北山谷右俣」という。）を挟んだ反対側の尾根筋、その尾根上の形の良い双耳峰（一つは今回初登頂した六二三二m峰）等が全て真白き雪に覆われ、それはそれは崑崙らしいたおやかな美しい景観を呈していた。雪線は五五〇〇m程度。いづれ近い将来、その向かいの尾根（雪稜）から夢ムスターグ峰を望見し、尾根上の相似峰を縦走し、北山谷右俣を囲む幾つかの無名の六〇〇〇m級の純白なピークに立とうという穏やかな思いが、この時のメンバーの一人、前田の胸に芽生えた。

この思いが基となって、二〇〇七年の山行として計画し実現する運びとなった。二〇〇七年六月時点の衛星写真情報から、右俣は二〇〇五年当時に比較して殊の外に残雪の少ない事が判明したため、この山行では、同じ北山谷左俣奥に鎮座している無名の未踏峰（六四六八m峰）及びベースキャンプを置いた大紅柳灘からアクサイチン湖北側の甜水海の間の無名の未踏峰も登山（偵察或いは試登）の対象に含め、柔軟な思考のもとに実施することとなった。

（一）計画概要　—高所順応を確かなものにするために—

本山行は高所順応が最も重要と考え、前二回の崑崙山行の経験知見を織り込んだ計画とした。

国内のトレーニングにおいて、出国直前の冨士山登山そして山頂での宿泊が台風直撃のため中止せざるを得なかった事、低圧室の利用が出来なかった事等、予定外のことがあったが、現地では概ね順調な高所順応

が得られたと思っている。高所順応には個人差も大きいようで、一人、相対的にSpO_2値の低いメンバーがいたが、彼は持前の強靭な体力・脚力にものを言わせて山行を全うした。

・メンバー：（L）安仁屋政武、（SL）前田栄三、（登攀L）芝田正樹、川久保忠通、泉谷洋光

・留守本部：近藤未知男（笹ヶ峰会会員）

・期間（日本発着ベース）：二〇〇七年七月二二日～同年八月一九日（二九日間）

・山行の期間（カシュガル発～山中滞在～イエチェン（葉城）帰着ベース）：二〇〇七年七月二四日～同年八月一〇日（高所順応期間を含め、一八日間）

（二）行動の概要

七月二二日：成田空港（芝田は名古屋空港）発、ウルムチに移動。

七月二三日：五人全員でウルムチからカシュガルに移動。

七月二四日：全員でタシュクルガンに移動。途中、スバシ峠（四〇〇〇m）で順応歩行。

七月二五日：クンジュラブ峠への通行は当初「問題なし」と言われていたが、現地入り後に不許可を知る。石頭古城城址に遊び、再びスバシ峠で順応歩行し、カラクリ湖畔を通ってカシュガルに戻る。

七月二六日：カシュガルを出発してイエチェン（葉城）に移動。イエチェンには中国人民解放軍の「高山病防治研究センター」があり、今回同行したガイドと二人の運転手は高山病の薬を購入した。

7月30日　アクサイチン湖

七月二七日：イエチェンからクディに移動。途中、アカズ峠（三三〇〇m）で順応歩行。

七月二八日：クディからマザに移動。途中、勝利橋（四一〇〇m）、四五〇〇m付近そしてセラク峠（四九〇〇m）手前から順応歩行。

七月二九日：マザから三十里営房を通って大紅柳灘に移動。途中、ヘイカ峠（四九三〇m）で順応歩行。

七月三〇日：休日。安仁屋と芝田はアクサイチン湖を訪問。途中、奇台大坂（五三四一m）から高台に登り目指す山域そして六二三二m峰を遠望した。前田と泉谷は二〇〇五年隊のABC跡地を訪れ、改めて今回のABCとする事を確認し炊事用テント&食堂用テントをデポす。

七月三一日：休日。芝田は六八五一m峰の偵察。

八月一日：C1予定地（五六六〇m）にテント三張等をデポす。BC帰着。

八月二日：C1上部の谷筋から周囲を観察、雪が無くC2の設営を断念。ABC泊。

八月三日：C1上部を偵察そして順応歩行。安仁屋と芝田はユメムスターグの第二登を果たす。C1泊。

八月四日：六二三二m峰に全員で登頂。C1泊。雪線は五八〇〇m。

八月五日：C1撤収し、BC帰着。

八月六日：BCにて休養。

八月七日：安仁屋、芝田、川久保の三人は、

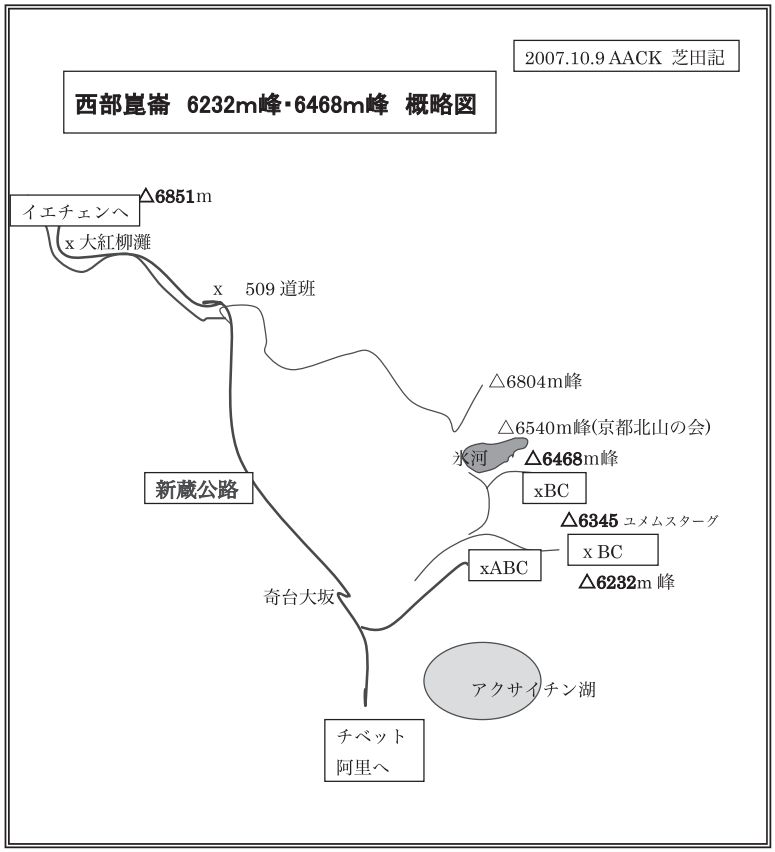
7月30日　6851m峰偵察

北山谷左俣に新しいC1を設営。前田、泉谷はアクサイチンを目指すも車輛故障のためBCに引き返す。

八月八日：三人は六四六八m峰に登頂し、新C1泊。前田、泉谷はアクサイチン湖訪問。

八月九日：三人はC1を撤収しBCに夕方帰着。前田、泉谷は六八五一m峰を偵察。全員合流した後、BCの大紅柳灘を出発、三十里営房に移動。

八月一〇日：全員イエチェン（葉城）に移動して、山行は無事終了。



西部崑崙　6232ｍ峰・6468ｍ峰　概略図

八月一一日～一八日：イエチェン～ホータン～カシュガル～ウルムチを逍遥。

八月一九日：帰国。芝田は一八日に帰国。

二、山行の記録

（一）六二三二ｍ峰

（N35°40'23"、E79°38'55"）

ソ連製二〇万分の一地図I-44-II参照。二〇〇五年伊藤等によって初登頂されたユメムスターグ峰（六三四五ｍ）とは北山谷右俣を挟み南西に位置する双耳峰。

七月三〇日　安仁屋・芝田はキダイ峠（峠の立て札には五二五〇ｍと手書きされていたがGPSでは五一九二ｍ）より稜線をさらに二五〇ｍ登高、六二三二ｍ峰を遠望、積雪量は僅かであること確認。前田・泉谷は車で二〇〇五年のABC地点（五四四〇ｍ）に到達、本年もこの地をABCと決定しテントをデポ。川久保は下痢症状のため休養。BCの大紅柳灘（四一五五ｍ）の招待所「天府食舫」に戻る。

七月三一日　休養日。芝田は単独で六八五一ｍ峰の偵察（後述）。

八月一日　○七：一○　大紅柳灘出発（四一五五ｍ）、○八：四○　キダイ峠（奇台大坂）（五一九二ｍ）、一〇：〇〇　ABC着（五四四〇ｍ）、一四：二〇　C1（五六六〇ｍ）設営、一六：二〇　ABC着（五四四〇ｍ）、一九：四○　BC着（四一五五ｍ）　ABC→C1は高度差は二二〇ｍ程度だが、二〇kgを超える荷物を背負っての河原歩きはきつい。自由なペースでC1を往復したが体力差により所要時間は大幅に違った。この日は高所順応の観点からBCに戻り、体調整備を図った。

八月二日　○七：三○　BC発（四一五五ｍ）、一〇：〇〇　ABC着（五四四〇ｍ）、一四：〇〇　C1着（五六六〇ｍ）、一七：〇〇　ABC着（五四四〇ｍ）。ABCで使用するテント二張はカシュガルのエージェントで用意した物であったが、夕刻の突風と砂塵にチャックが壊れ、食事用のパオに逃げ込む事態となった。五〇〇〇ｍ超えでの宿泊となったがこれまでの高度順応の結果か、全員体調順調に見えた。

八月三日　○八：一○　ABC発（五四四〇ｍ）、一〇：四五　C1着（五六六〇ｍ）、一一：三五　安仁屋・芝田・川久保はユメムスターグ峰（六三四五ｍ）へ出発。途中、

8月4日　6232ｍ峰

川久保は高所順応歩行に留め六〇〇〇ｍで下山。一五：三〇　安仁屋・芝田六三四五ｍ峰登頂（二〇〇五年伊藤等四名に続く第二登）、一七：三〇　Ｃ１着（五六六〇ｍ）前日に六三四五ｍ峰の登高ルートを見定め、ユメムスターグはＣ１から日帰りアタックの勝算ありと判断していた。しかし、今回の登山の第一目的が「全員での六二三二ｍ峰登頂」であることから、「無理をしない範囲で行ける所まで」を前提に出発。頂上直下の三ｍの雪壁を乗越すところ以外は危険性を感じなかった。前田・泉谷は高所順応歩行を兼ねて六二三二ｍ峰の登路確認。Ｃ１帰着後、安仁屋の食欲は落ちなかった由だが、芝田はスープ類しか受け付けず。

8月3日　6232ｍ峰

八月四日　〇八：一〇　Ｃ１発（五六六〇ｍ）、一三：四〇　六二三二ｍ峰を全員で登頂、一五：一五　Ｃ１着（五六六〇ｍ）この山域のルンゼは大岩ゴロゴロの急斜面。二時間の登りで雪面に到達（五八三七ｍ）、前半は雪の腐った急斜面（下山時は尻セード）、後半はアイゼンの利く雪面。残念ながら曇天で視界は冴えず。双耳峰の縦走も計画にあったが、東面は雪のない大岩のガレ場で歩行できず。雪のない尾根筋には縦走意欲も消滅。登路を辿っての下山となった。一五時頃より小雪が舞い始めた。

八月五日　〇九：〇〇　Ｃ１発（五六六〇ｍ）、Ｃ１を撤収し二五kg近いザックを背負って下山。一一：〇〇　ＡＢＣ着（五四四〇ｍ）、一三：一〇　六四六八ｍ峰のルート確認のため、車で北山谷左俣へ移動、一五：四〇　ＢＣ着（四一五五ｍ）。日本を出発する時点で「主目的の六二三二ｍ峰登山が成功したうえで余裕があれば登山の対象とする」とのメンバー合意があった北山谷左俣奥の六四六八ｍ峰を確認。この峰は、二〇〇〇年京都「北山の会」が遡行し初登頂した六五四〇ｍ峰と、氷河を挟んで南東に聳える未踏峰である。

（二）六四六八ｍ峰

（N36°46'01"　E79°36'52"）

八月六日　休養

六四六八ｍ峰の登山計画を討論。メンバーは安仁屋・芝田・川久保の三名。ＡＢＣは設置せず、実働四日予備一日、テント一張で行動することとする。大紅柳灘で激しい夕立があった。

八月七日　〇七：一〇　ＢＣ発（四一五五ｍ）、一一：三五　車の最終到達地点、五四一三ｍ、一五：〇〇　段丘上（五六二三ｍ）、一四：三五　新Ｃ１（五六八六ｍ）

昨日の降雪で五〇〇〇ｍ以上は白くなっており、雪崩の危険を想定したが午後には新雪は消えた。車のエンジントラブル（ガソリン気化器のノズル詰り）で一時間ロスするも、五日の偵察時よりも一段奥まで車が到達。急なルンゼは予想以上に時間が掛った。段丘の先で沢が左右に分岐。右側の沢に入るべく小尾根を登りショートカット。

出水の恐れのない河原に新C1を設定。
計画では①六一〇〇～六二〇〇mの稜線にC2を設置する　②C1から一気に頂上をアタックする、という二案があったが、ルート上に極端に困難な箇所がなさそうなこと、ユメムスターグの経験（五四四〇mのABCからC1を経由し六三四五mに登頂）から標高差八〇〇mは一日で登高可能と判断。翌日はアタック体制とすることに決定した。
この辺りまで手押し車と思われる二輪車の轍が見られた。山域全体が玉（羊脂玉）など宝石の原石を産出するので山師が入っていると考えられる。
八月八日　〇七：三〇　C1発（五六八六m）、

8月8日　6468m峰

〇九：四〇　カール状雪田（五九〇〇m）、一二：〇〇　稜線（六二一三m）、一三：一〇　頂上（六四五五m）、一五：一五　C1着（五六八六m）
カール状雪田までのルンゼは予想通りの急傾斜で時間も掛った。雪田から上部は踝から脛位のラッセル。湿雪でアイゼンが団子になる嫌な雪であった。川久保のアイゼンは特に雪が付着し二、三歩毎にピッケルで叩き落す作業が加わり、相当消耗した由。途中からは安仁屋がトップを務め、快調に急雪面を登高。
頂上部は雪庇が三mも北側に張り出していた。いくつかのコブがあり、最も高そうな二ヶ所を踏んだ。快晴、三六〇度の展望を

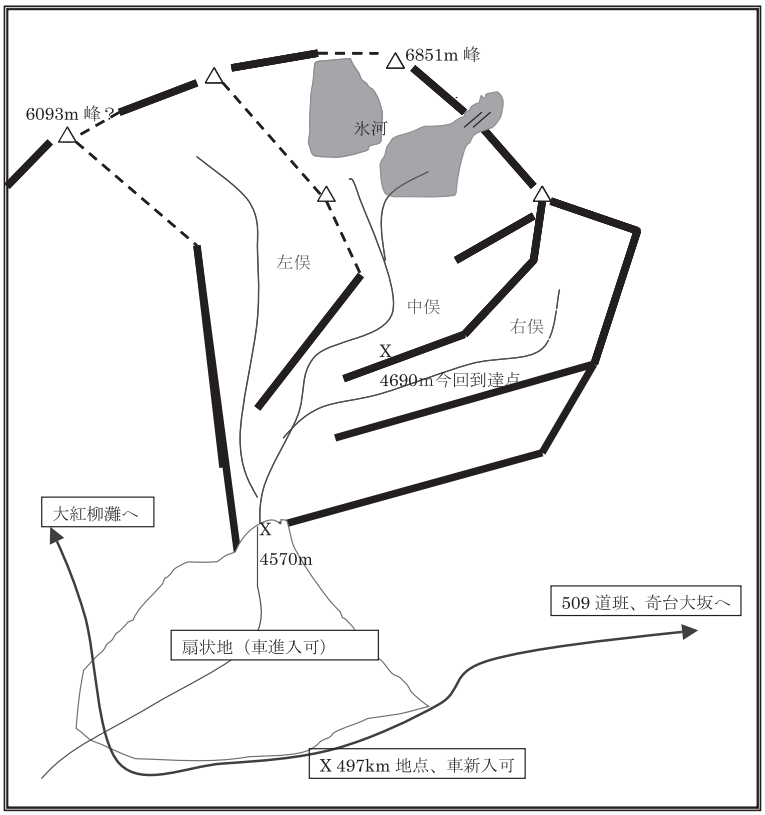
8月12日　和田のバザール

楽しみ四〇分ほど滞在。
下山路は南東面を尻セードで滑り降りた後、東に伸びる尾根を使った。途中の尾根上に長さ二〇〇～三〇〇m、高度差五〇m位の氷河が掛っていた。氷河専門の安仁屋も「前後左右に氷河がなく、尾根上だけに氷河があるのは？」と首を傾げる代物。
八月九日　〇八：三〇　C1発（五六八六m）、〇九：一五　分流点（五六五五m）発（荷物をデポ）氷河調査、一三：〇〇　分流点戻り、一四：四〇　車と合流、一六：四〇　大紅柳灘着（四一五五m）、一七：四五　大紅柳灘発、二〇：五〇　三十里営房着（三八五五m）
本沢は二〇〇〇年の京都「北山の会」の六五四〇m峰登山の際に使用したルート。沢岸や氷河の末端にテント生活の残痕があった。大きな池があり七羽の水鳥（白い腹部以外は真っ黒のカモ類）を発見。アクサイチン湖で見たカモメにも驚いたが、こんな高地にもカモメが生息。氷河末端に直径二〇m程度の水溜りが四、五個あった。一番手前のものは完全氷結、二番目は半分氷結、三番目は氷なし。この一番目の氷表面にユスリカのボウフラの抜け殻が大量に浮いていた。
五三〇〇mの河原には所々に黄色の花を付けた植物が見られるが、ここには野生のレイヨウ類の足跡が多数あった。
計画では実働四日予備一日であったが、車は三日目から出迎えるよう指示していたのでBCの大紅柳灘にタイミング良く帰着。

前田・泉谷も相前後して六八五一m峰の偵察から大紅柳灘に帰着。

大柳紅灘からイエチェンまで一日で移動するには長すぎること、自動車の故障や途中の道路事情などの不確定要素を織り込み、三十里営房までの移動を決定。

案の定、エンジン不調のため何度も停車・修理を繰り返し、道路を寸断する濁流を乗り越えてやっと三十里営房に到達。七月二六日以来、約二週間に及ぶ禁酒令を解き飲酒するところとなった。



6851 m 峰概略図

（三）六八五一m峰（偵察）

（N36°01′、E79°20′）

ソ連製二〇万分の一地図 J-44-XXXII 参照。

イエチェンからいよいよ新蔵公路へ。日産パトロールの窓から崑崙山脈の雪を抱いた峰々が見えて隠れ。巻き上げる砂塵をものともせず車窓から「より魅力的な山はないか？」と物色。

七月三〇日、安仁屋とアクサイチン湖を往復した際、快晴の中、キダイ峠（奇台大坂）から見たピラミッド型の山が大紅柳灘の直ぐ近くにあり、かつ標高がソ連製二〇万分の一地図で六八五一mあることが判明。翌三一日は休養日となったため、芝田ひとり偵察に行くこととした。

〇九：四〇 大紅柳灘発、一〇：二五 新蔵公路四九七km地点から河岸段丘進入。車停止歩行開始（四四二〇m）、一一：二〇 三俣分岐点（四五三〇m、ソ連の地図上では四八七六mと記載）、一二：二五 中俣遡行、左岸の尾根中腹（四六九〇m）で引き返す。一三：一五 車と合流（四三八〇m）、一三：二五新蔵公路四九七km地点（四一八五m）、一三：五〇 大紅柳灘（四〇九五m）。

〈注：高度は芝田のCASIOのPROTREKの標高で表示。大柳紅灘を四一五五mとすると十六〇mの補正が必要〉

三俣のうち左俣は六〇九三m峰に突き上げ、途中から氷河になると思われる。右俣は涸れ沢で稜線の途中のピークに突き上げている。

中俣は一旦大きく右に回り込んだ後二股に分岐し、いずれも上部は氷河となり主峰（六八五一m）を囲むようにコルに達すると思われる。この稜線は頂上直下が急傾斜となっており登路に使えるかどうかの判断はできなかった。

この沢にも玉を捜して山師が入っている。二ヶ所でケルンが見つかり、ビニールで梱包した原石が河原に置いてある（忘れられている）のを発見した。

本峰は大紅柳灘（招待所）から近い上、標高・山容とも立派で挑戦欲を駆り立てる対象である。

この他、京都「北山の会」崑崙隊が二〇〇〇年に初登頂された六五四〇m峰の、北北東に位置する六八〇四m峰（N35°55′、E79°35′）を遠望した。立派な山である。氷河末端の分水嶺を越えて南面の尾根からアプローチするのも一策かと考えた。

尚、本山行に際しまして斎藤惇生先生には高山病対策のご指導と薬品類のご提供をいただきました。誌面をお借りして御礼申し上げます。今回の山行中、川久保忠通によりSpO_2の測定を行いました。測定結果の考察については別途公表があるものと思われます。

ジャマイカでの三年

安田隆彦

ＪＩＣＡシニアボランティアは現在世界五〇カ国で約八〇〇人が活動している。その一員としてジャマイカで海底の山脈探しをしてきました。また初めて異文化圏での長期滞在で思わぬ経験もしました。

奴隷の末裔の国

ジャマイカはキューバの南、カリブ海に浮かぶ小国、四国の半分の大きさに二六〇万人が住んでいます。一四九四年五月、コロンブス二回目の航海で発見され、スペインの植民地としてプランテーションが始められた。スペイン人の持ち込んだ疫病で純な原住民アラワク人が死滅したのでアフリカから奴隷が労働力として輸入された。一六五五年カリブの海賊ヘンリーモーガンの活躍もありイギリスの植民地になる。一九六二年独立した英連邦の一員。人口の九〇％が奴隷の末裔で成り立つ国です。

南国の楽園

教育生活様式すべて英国式で英語がネイティブ、お陰で欧米への出稼ぎが外貨収入の中心、二番目が太陽と海が売り物の観光収入です。平均気温二七～三二度の常夏の国ですが日本の夏より快適、年中花は美しく、果物が豊富です。昭和三〇年代ハリーベラフォンテの歌で有名になったバナナや砂糖生産の面影はなく、唯一の輸出資源はボーキサイト。

日本では有名なブルーマウンティンコーヒーも量的にほんのわずかです。

音楽ファンならご存知のレゲエ発祥の地、今でも世界から愛好者の集まる巨大コンサートが度々行われます。アフリカの血が流れる俊敏な国民、陸上競技が盛んで甲子園野球のような熱狂的に応援報道がなされる陸上競技大会も多く、短距離オリンピックメダリストは何人も居ます。民主主義の定着度は日本よりかなり先輩です。会議の仕方、議論の仕方、反対意見の扱いなどは感心すること度々でした。先進国病にかかった一部の人を除き、時間に無頓着に生活し、いつも笑うことを最優先に考えるジャマイカ人にとってはまさに南国の楽園です。

貧困漁村対策

派遣先はカリブ海事学校でした。設立二五年、先生五〇人、生徒三〇〇人の専門学校。

日本から機関、電気、漁業のボランティアが派遣され、その方々のコーディネート役をしていました。漁業専門家と現地事情を調べたところジャマイカは大陸棚が狭く浅瀬漁場が枯渇して困っている。海洋国に来た観光客に出される魚介類はすべて冷凍輸入物ばかりという状況。その対策として深海漁法の導入が国家目標としてかかげられていた。日本はカリブ諸国一八カ国の漁業支援のためカリブ諸国最南端にあるトリニダード・トバゴに漁業専門学校を設立した。ジャマイカ政府の要請により深海漁法の一つとしてソデイカ漁を指導する事になり、そこから専門講師がやってきて四日間にわたり講義と船上実習がなされた。しかし実習で一匹もソデイカが捕れなかったので、参加者は誰も新漁法に興味を示さず、日本から供与された漁具一式はそのまま漁業局の倉庫に入れられて放置されることになった。素人目には無駄な援助に見えるが、ＪＩＣＡの説明によると、日本の任務は有益と思えることを教えるだけで、教えた知識を利用するか、しないかは被援助国の責任で日本側は関係しないとのこと。それはおかしいと思い、何とか無駄な援助を生かせないかと新たな活動を開始した。

ソデイカを捕ろう

ソデイカは熱帯海域全域にいる深海魚、頭の大きさ一ｍ前後で足は短く、重さ十数キロ、味は上質。寿命がわずか一年の生き物で、どこでどのようにしてこのように大きく成長するのか生態はまだほとんど分かっていない。一五年ほど前から沖縄海洋研究所と漁業組合が協力して調査を開始した。繁殖期に二

ソデイカの卵

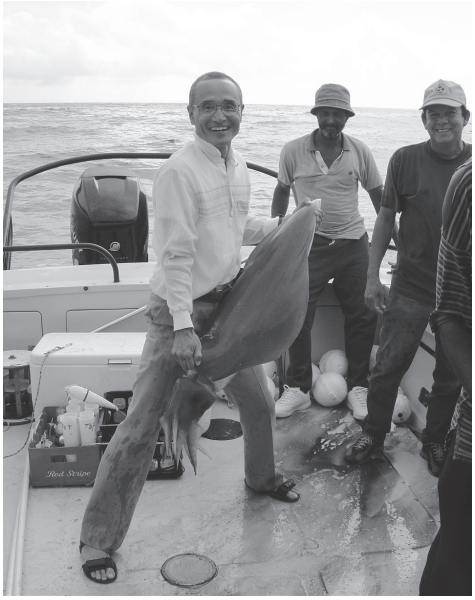
匹がペアーになり、海底の深さが一〇〇〇ｍぐらいの海域で、その中間の五〇〇ｍぐらいのところに数ヶ月間漂っていることを突き止めた。そこに釣り糸をたらせば商業ベースに乗る漁が出来ることがわかった。ソデイカ漁を始めてみると収益が極めて良く、やがてソデイカが一般魚をしのいで稼ぎ頭になってきた漁村が多くなってきたほど。世界中でまだ日本しか商業捕獲をしておらず、旨く漁法をジャマイカに定着指導出来れば日本の顔の見える援助として有意義なものになる。そのためには先ず獲れる場所を予め見つけておき、そこに漁民を案内して漁法を指導しなければならない。いわゆる資源調査が必要である。

ソデイカは寿司として味が良いので急成長しているアメリカの寿司市場に向けて輸出することを前提にする。ジャマイカ漁業では漁獲したものを氷に入れて持ち帰る習慣がない。ソデイカ漁と共にコールドチェーンの思想も定着させれば、地元産の少量の魚も観光客用ホテルに高値で販売できるようになる。万一ソデイカが見つからなくともコールドチェーンが定着すれば活動は無意味にはならない。

ボランティアなので予算はないが、大学、漁業局、漁業組合、海洋公園、海事学校、日本大使館、ＪＩＣＡがもてるものを持ち寄り、手弁当方式で調査すれば何とかなると説いて回り、活動開始にこぎつけた。同行した漁業専門家はこの様な資源調査は本来ボランティアの出来ることではないと協力を拒否されたので、一回講習会を受けただけの素人がインターネットから得られる情報で知識を補充しながらのスタートとなった。

エッグトレースメソッド

どこから調査すれば良いかトリニダード・トバゴのソデイカ専門家に海図を送り、優先調査地域の指導を仰いだ。一〇〇〇ｍの海底ラインに沿って島一周調査するアドバイスを受ける。手始めに学校から一番近い海域と観光ホテルが多い第二の都市、モンテゴベイにて調査をはじめた。大陸棚が狭くて浅瀬漁場の貧弱なことは、逆に深海地域が漁村に近いことになり有利になる。ジャマイカ漁民の使っている船は長さ一〇ｍの小船。沖縄と違い五〇〇ｍのラインもすべて手作業で上げ下げする。小さな島に大きな山があるので山風が強く、海が静かなのは一日数時間、帰りは何時も木の葉のように揺れながらカリブの海水を体中に浴びて帰ってくる。どんなに揺れても船酔いしない体に生んでくれた母に改めて感謝する。一年目は何の成果もなかったがソデイカの卵らしきものを見たという漁民に出会った。卵が陸に打ち上げられるならその近くを探せば良い。ソデイカの卵は直径三〇㎝、長さ一・五ｍから五ｍぐらいで円筒形のジェリー状、他の生物で似た様な卵を産むものがいない。ソデイカの資源調査はまず陸から始めて、卵の流れ着く地域を特定し、その近くの海を探せば費用が大幅削減される。これをエッグトレースメソッドと名付け、ソデイカの卵の写真を持って全島の漁村を巡った。卵を見た漁民のいる地域は全島で二箇所



ソデイカ

だけで極めて限られた地域だった。

初漁獲

二年目はエッグトレースメソッドで目星を付けた地点で調査開始したところ二回目の出漁でジャマイカ初のソデイカをあげることが出来た。重さ六kgの子供だった。早速大使館の料理人による試食会が行われ七種類のイカ料理を味わい、イカ刺しも極上の味でソデイカ漁の将来も大きく夢が膨らんだ。しかし喜びもつかの間、その後何度漁に出ても釣り上げる事が出来ず落胆の日々が続いた。失敗を重ねるごとに深海の様子も少しずつ判明してきた。表層の海流と低層の海流とはまったく逆に流れていることが多い。釣具に何らかのあたりの有るポイントは海底の尾根が張り出し、それに当たって深海流が上昇流となっている狭い地域に絞られる。しかも深海流の方向が変わるたびに上昇流の発生する地域が変わるので海底一〇〇〇mの地形を正確に把握しなければならない。この地域の海図は精度が悪く正確な漁場特定の助けにならない。資金があれば高精度のソナーを使って簡単に調査できる。残念ながら貧乏ボランティアは五〇〇mラインの一番上に付けたブイの動きと、擬餌針が引きちぎられたり、足だけ引っかかって上がってくるわずかな当たりから、勘だけで上昇流を起こす深海の山脈を推定しなければならない。ソデイカの猟期は一一月から四月の半年間、二年目は残念ながら子供一匹で終わり調査を懐疑的に見る人が多くなった。

新資源の発見

三年目も手ぶらで帰る日々から始まった。しかし海底山脈形状の把握が進んできたころ、やっとのことで大人のソデイカを獲る事が出来た。重さ一五kg、頭の長さだけで一・二m。ものすごい引きで、外れないよう慎重に揚げること約三〇分、最後に船上に引き上げる時体中に墨を引っ掛けられた。ずっしりと来る感覚は苦労を一気に消し去り、一匹から千貫も出来る極上のすしを関係者全員で楽しむことが出来た。その後狙った地点で成長したイカをさらに二匹上げることが出来ソデイカ資源がジャマイカ海域にいることの証明は出来た。記者発表をして三年の任期を終えたが、今後ソデイカ漁の定着指導をしてくれるボランティアが継続して来てくれる事を祈っている。

カリブ諸国一八カ国のほとんどは大陸棚の貧弱な国ばかり。ソデイカ漁が広がれば大きな福音になる。そのためには予算が少なくて資源調査の出来るエッグトレースメソッドは大きな助けになるはず。小論文にまとめてカリブ地域海洋学会の年次大会に発表した。

絶滅品種を食べつくしている

日本人の長寿の秘訣は魚を食べることが一つの大きな要因。西洋人も出来るだけ肉から魚に転換したほうが良いのにと思っていた。漁業に関係し、現況を学ぶと世界の漁業資源は危機的状況にあるとのこと。日本の影響で欧米での魚消費が増え始めたところに狂牛病、鳥インフルエンザの事件が発生した。さらに中国の所得向上で魚消費量が急増して、世界的に魚不足になってきた。養殖でいくらでも魚の生産量は増やせると思っていたが、養殖の餌になる小魚が急減しているとのこと。最近のニュースでクロマグロの危機が伝えられたが、それはほんの一部のこと。世界漁業の七五％の魚種は危機水準にある。そのうちの二五％もの魚種が絶滅寸前とのこと。ひどい話は操業している漁船は捕獲した魚の平均二〇％しか陸まで持ち帰らない。あとの八〇％の魚は運搬賃に見合わない安物の魚と言って洋上で捨てているとのこと。嘘の様な話ですがどうも事実のようです。詳しくは左記書籍が大変参考になります。

飽食の海（世界から寿司が消える日）
チャールズクローバー著　岩波新書

英国を中心に親魚を減らさない良い漁法で取った魚に優良マークをつけ、消費者サイドから危機水準にある魚種を買わない運動が盛んになってきた。詳しくはhttp://fishonline.comを見ていただくとびっくりするような事実が判明します。

日本でもイオン系のスーパーでこの優良マークをつけた魚の販売が始まっています。

人道支援

欧米人の人道問題に対する共感度が日本人に比べ異状に大きいことを肌で感じた。キリスト教精神から来るのだろうと推察する。アフリカの飢餓に対する報道はかなり頻繁に行われる。また市民の行動も盛んだ。二〇〇五年スコットランド先進国サミットが行われた

際、飢餓に対する政治家の取り組みが悪いとして歌手のBob Geldofが提唱した世界八会場でのライブコンサートには百万人が参加し、テレビを見た人は数千万人の規模とのこと。スコットランドの会場に二五万人が押しかけ政治家の奮起を促したデモは、欧米全体から市民の自費参加によるもの。単にかわいそうと思うだけの日本人と、人道的見地から黙って見過ごすわけに行かず、直接行動で表現する欧米人との大きな違い。横田さんの拉致問題が報じられると直ぐにポップシンガー（ポールストーキー）が歌でサポートしたり、映画監督がドキュメンタリー（アブダクション、横田めぐみ物語）で悲劇を訴えたりするのを見ると日本人として恥ずかしくなる。

幼児医療援助は問題あり

産業革命以来の人口爆発は制止が利かなくなっている。今や地上の食料の源となる水までも絶対的に不足し始めている。少子化問題などは先進国の中だけの話し。途上国ではいまだに急増中。先進国の幼児医療の発展は目覚しい。その技術を医療援助で途上国に持ち込むと人口爆発に拍車をかける。例えば五人の内一人しか成人しなかった、貧しいながらも落ち着いた地域に、幼児医療援助をして急に四人大人になったら失業者の急増を招き、食料もない。彼らの行く末は戦争をするか、自爆ゲリラになるか、先進国のゲットーに潜り込むかいずれにしても悲劇が大きくなるだけである。大人に対する援助を先行し、妊産婦幼児医療援助は後回しにしないと善意のもたらす悪影響が人類に襲い掛かってくる。

ホエールウォッチング

捕鯨は日本の伝統的食生活、他国からとやかく言われる筋合いではない。文句があるなら先に残酷な闘牛を禁止したらどうかと言い返して来た。中南米を欧米人のツアーに混じってよく旅行した。こちらが日本人であることがわかると三人に一人は鯨を食うのか、捕鯨をどう思っているのかと聞いてきた。彼らの鯨に対する特別な感覚が日本人の想像以上であることを悟った。

二〇〇六年八月カリブ諸国の一つ、セントキッツで捕鯨会議の有る頃から現地新聞紙上で頻繁に日本たたきの記事が出た。日本からカリブ諸国への無償援助は年間一〇〇億円超、そのほとんどが漁業関係施設援助。しかし現地にはわずかな漁民しかいないので援助されたものはほとんど利用されていない。日本の援助の目的は捕鯨の賛成票を取るためだけの物であるとの非難。

エクアドルにホエールウォッチングに出かけた。首都キトーから三〇分のフライトで海岸の町マンタへ。そこからバスで二時間、人口三〇〇〇人ほどの田舎の閑漁村プエルトロペス。村はずれに場違いにシックなホテルがあり、二軒合わせて六〇〇床、鯨のいる四ヶ月ほどは何時も欧米人で満杯。漁民の仕立てた小型漁船で沖合へ一〇分も走るとあちらこちらに噴水が見え始める。それをめがけて船を近づけ、すぐ横で巨大な鯨がゆったりと泳いだりもぐったりする様を見る。テレビでは何度も見たシーンだが手の触れそうな真近で見ると感動的。これだけ多くの観光客を引き付ける魅力を実感できた。鯨を獲ってしまえばそれまで、見ている限り毎日の現金収入が続く。交通機関、宿泊設備、鯨見物船にかかわる現地人の雇用はきわめて大きく、観光産業の方が捕鯨よりはるかに経済効果が大きい。

日本で捕鯨を推し進めている人は一部の漁業組合とその政治献金で動かされている人だけで、鯨を食いたい日本人はきわめて少数。長期捕鯨禁止を維持し、日本近海にも昔のように鯨が沢山接近するようになればそれを利用した観光産業は過疎漁村を大いに潤すことであろう。欧米の動物愛護モラルに従い、無駄な援助をやめて節税し、観光による経済波及効果を推し進めれば三方両得である。

ガラパコス島

エクアドルの首都キトーから二時間のフライトでガラパコス諸島に行ける。

全身真っ白で体の三倍ほどの長い尾を持ち、黒い目と真っ赤な嘴が引き立つ極楽鳥の求愛ダンス。羽を広げると二・五mもある黒いグンカンドリが真っ赤な風船を首から胸にかけて膨らましてバタバタと愛を迫る様などを目の前で見るのは圧巻です。地元民の住む裏庭の野原で巨大なゾウガメがあちこちでバリバリ野草を食べている。青足都鳥が散策道の真ん中で卵をかえしている。周りで観光客が写真を撮っていてもまったく意に介さない。長年の平和共存の成果はすばらしい。

海に潜れば六〇～九〇㎝もある極彩色のパロットフィッシュが大群をなして岩のコケをつつく音が軽快な響きとして海中にこだましている。

沢山有る島を一週間かけて船旅で回るのが良い。毎日違った島に寄り、島ごとに特徴のある動植物をゆっくり楽しめる。一度は行ってみたい観光地です。

『大日岳の事故と事件』を巡って

斎藤清明

斎藤惇生編『北アルプス　大日岳の事故と事件』（ナカニシヤ出版）が今年九月に刊行された。斎藤が「はじめに」と「結語―大日岳の事故と事件から学んだこと」を載せているほか、岩坪五郎、荻野和彦、横山宏太郎のＡＡＣＫ会員も執筆している。この「事故」と「事件」にはＡＡＣＫ関係者がかなり関わっているので、書評も兼ねて紹介させていただく。

この本のタイトルは『事故と事件』である。遭難「事故」というのはわかるが、なぜ「事件」となったのか。最終的には検察当局の嫌疑不十分で不起訴という決定によって「事件」は幕を閉じるのだが、そのいきさつや対策のために奔走した登山関係者や弁護士の活動の記録が綴られている。また、「事故」の解明のための調査、研究の取り組みもよくわかり、会員諸氏にも一読をお勧めしたい。

大日岳の「事故」とは、二〇〇〇年三月、文部省登山研修所主催の大学山岳部リーダー冬山研修会中に雪庇崩落事故が発生、二人の学生が死亡したものである。

まず事故のありさまが、序章「大日岳で起こった雪庇崩落事故」で、実技主任講師の山本一夫氏らによって記される。全国の大学から三二名の研修生が集まり、一〇名の実技指導員が研修にあたり、事故当時（三月五日午前一一時二五分ごろ）、大日岳山頂には一八名の研修生と九名の講師がいた。

山頂付近には樹木やケルン、岩など特徴のある地物はすべて雪の下に隠れていた。天気は快晴、無風、気温はマイナス六度。（写真を撮ろうとして）雪庇の先端方向に行こうとする研修生に、講師のひとりが大声で「引き返せ」と注意した。まさに、その直後、大日岳の巨大な雪庇が崩落した。

研修生九名と講師二名が、「せり」に乗った役者が舞台からゆっくりと姿を消していくように、落ちた。ほとんど全員が立ったまま崩落位置の直下に止まって無事のように見えた。しかし、雪崩が誘発されていた。研修生二名が、雪崩に巻き込まれて行方不明になる。ただちに捜索救助が行われ、ビーコン反応も捉えたが、二人は見つからなかった（その後、七次にわたる捜索活動で、五月一五日と七月一一日に遺体が発見される）。

主任講師の山本氏の文章から、雪庇に乗らないように慎重にルートを選ぼうとしていたことがわかる。それにもかかわらず、「わたしが山頂だと考えた位置は約二五メートル風下側に逸脱していた。結果的に、ルートを誤り、雪庇の上にいたということは認めざるを得ない」と率直に記す。しかし、予想もできないほど巨大な雪庇ができていた場合には位置をどのように判断すればいいのかも含め、雪庇に関してまだまだ未知の部分が多いのも事実だという。

この序章には、遭難した研修生の講師だった高村真司氏も富山県警上市署での「事情聴取と取り調べ」を書いている。事故の二年後に二人の遺族が国に対して民事訴訟を起こした直後に、警察が動きだしたようだ。講師らを召喚し、被疑者としての取り調べ、あるいは参考人として事情聴取をしたのである。容疑は業務上過失致死罪。こうして「事件」が始まった。

高村氏によると、担当刑事は現場の「判断ミス」ということを前提に話を進め、そのような結論になるように誘導しているようだったという。発言は真実と違うように解釈され、捻じ曲げられ、正確に受け取ろうとしない刑事の先入観によるきめつけに激しい憤りも感じた、と。尋問は休憩時間などなく、タバコの煙が充満する取調室で行われ、調書作成には何時間も待たされ、まるで罪人のような扱いを受けたそうだ。山本氏も上市署では頭から「お前は犯人だ」という扱い受けたそうだ。ある講師は、夕食もとれないまま延々と調べられ、やっと午前一時に放免された。山本氏が抗議すると、「そういう事実はない」。こうした警察の取り調べに対する批判が綴られて

いるが、「事故」がまさか「事件」になる（される）とはおもいもしなかったのだろう。

二〇〇二年一一月、山本、高村の両氏は業務上過失致死罪容疑で富山地検に書類送検された。「大日岳山頂付近で雪庇崩落の危険性があることが予見できたにもかかわらず、危険回避のための適切な処置を怠った結果、研修生らを雪庇上に進入させ、雪庇崩落により二人の学生を死亡させた」と。富山県警が二人を罪に問うことによって「事故」が「事件」になったのである。

この送検を報道で知った荻野や岩坪は、大変なことになるとおもったという。すぐに山本に対策を立てるようにすすめ、弁護士に相談する。山本が加入している日本山岳会京都支部には支援委員会が設けられる。といった具合に、「事件」とされたことにどのように対処したかが、この本には詳しい。

じつは、本書は講師二人に対する刑事事件が不起訴処分になったのちに発足した「大日岳事件研究会」での報告や論議に沿ってまとめられ、章立ても六回にわたる研究会の順になっている。そのなかでも、「事件」にさせてはならないという取り組みが、隠れた本論といってもいいだろう。次のような記述があって、大いに参考になる。

みんなが認める優秀な登山家であっても、事件に仕立てようとする警察官にかかると、赤子の手をねじるようなものだ。警察で調書はどのようにとられるのか。弁護士といかに相談するのか。検察官の取り調べとその対策に、「立件されたら対策を考える」のではなく、「立件させないために対策を立てる」をとった。「不起訴嘆願署名」は検察庁に対して効果がある（最終的な署名は七九二七名、弁護費用などのための募金は八〇二名から約七六五万円にのぼった）。民事訴訟での原告の主張が検察官の取り調べの材料になっていることがわかり、こちらの取り調べに備えた。弁護活動の目的は不起訴処分を得ることが最大の使命であって、真相解明は必ずしも任務ではない。真相解明と司法捜査は決して両立するものではない…。

そして、刑事事件は不起訴となった（二〇〇四年六月）。富山地検は嫌疑不十分で過失を認めることができないということであり、「事件」は無罪といえる。

しかし「事故」の真相は？　どうして事故はおきたのか。なによりも、大日岳での雪庇の形成や消滅（崩壊）の過程がほとんどわかっていない。その解明をめざして、「事件」と「事故」の関係者らが取り組んだ。

巨大な雪庇が発達すると見られることから科学的な解明をめざして大日岳積雪地形研究会（代表幹事、斎藤惇生）が組織され、二〇〇五年四月には総勢五一名で一一日間、大日岳の山頂付近で現地調査も行われた。そのレポートは、このニュースレター三五号（二〇〇五年七月）で荻野・岩坪が書いているので、記憶に新しいこととおもう。

斎藤惇生を総責任者に岩坪が山麓の連絡事務所を、荻野が現地基地を担当。横山宏太郎（中央農業総合北陸研究センター気象資源研究室長）、川田邦夫（富山大教授）、飯田肇（立山カルデラ砂防博物館学芸課長）が研究指揮、山本一夫が行動指揮を執った。雪氷研究者の調査をプロの山岳ガイドや日本山岳会員らがサポートし、雪庇（せっぴ）を掘削し、積雪地形の形成や崩壊過程を調査したもので、雪の高山での巨大な雪庇掘削調査は世界でもほとんど例がなく、画期的なものだった。

この調査などによって、大日岳の巨大雪庇の実態がかなり明らかになった。尾根にできる雪の「庇」のような規模ではなく、風上側から吹き寄せられた雪が山稜を越えるところで吹き溜まり、風下側に巨大な雪の構造体となった、まさに「巨大雪庇」であることが。そして、巨大雪庇は底が抜けるように崩壊したらしい。吹き溜まりは安全だという神話が崩れ去ったといえる。

こうした巨大雪庇の形成や消滅（崩壊）の過程がわかってきたことは、研究者とプロのガイド集団、登山者たちの協働作業によるものである、と編者は評価する。日本の登山文化の向上にも寄与したといえよう。ＡＡＣＫ会員がその活動の中心になったことは、特筆していいだろう。われわれの今後の活動のひとつの方向を示しているようだ。

なお、遺族が国などを相手取った民事訴訟は、富山地裁での一審判決（二〇〇六年四月、原告側勝訴）ののち、今年七月に和解が成立した。本書の刊行には間に合わなかったようで、その内容には触れられていないのは惜しい。

ブータン王国の新憲法

栗田靖之

一九五八年、中尾佐助氏が日本人として初めてブータンを訪れた。それ以来、京都大学山岳部は、小野寺幸之進氏、松尾稔氏などに率いられて数次にわたる学術調査隊を送り、一九八五年には、掘了平氏のもとでマサ・コン峰（現在の推定標高六七一〇メートル）の初登頂をはたしている。また一九八二年、桑原武夫氏は、日本ブータン友好協会の初代会長となった。これは日本とブータンとの正式な国交が樹立される四年前のことである。ブータンはＡＡＣＫにとって、とても縁の深い国である。

そのブータンが、二〇〇七年八月一日、憲法の最終草案を発表した。ブータン王国には、一九五〇年以来トリムズン・チェンモという伝統的な最高法が存在していると言われているが、近代的な憲法そのものは存在していなかった。

新たな憲法の制定にはどのような意味があるのだろうか。なぜ今ブータンが憲法を制定しなければならなかったのか、ブータンの情勢について紹介したい。

ネパールからの批判

憲法制定の背景には、ブータンに居住するネパール系住民の問題がある。ブータンの人口は七〇万人で、その内二〇パーセントがネパール系住民であるとされている。第四代ジグメ・センゲ・ワンチュック国王は、ブータン国内に不法に滞在しているネパール系住民の増加に手を焼いていた。とくに標高一五〇〇メール以下の地域には、ネパール系の住民が多数居住するようになったのである。一九八九年、ブータン政府は、国内に不法滞在するネパール系住民の排除に乗り出した。丁度その頃、本国ネパールでは、民主化運動がおこった。その余波は、ブータンのネパール系住民の間にも波及し、ブータンにおける民主化要求の運動が起こった。それは当然ブータン政府に対する批判でもあった。

そのような批判のひとつは、ブータンは王政であって国民の意思が政治に反映されていないというものであった。ブータンには、一九五三年以来、一五〇名からなる議会があった。議員の内一〇五名は国民から合意または選挙によって選ばれ、一〇名は僧侶から、三五名は政府の代表から選ばれたのであった。

このような批判に対して、国王はいろいろな改革を講じてきた。一九六八年、国王の任命による大臣会議が創設され行政権は大幅に大臣会議に委譲された。一九九七年に議会に国王の罷免権をもたせた。この国王からの提案には、当時の議会は驚いたが、国王の強い意志として可決されたのである。また一九九八年、それまでの国王の任命による大臣制度が廃止され、議会における選挙によって大臣選出が行われた。二〇〇三年には、議会で選ばれた一〇人の大臣の上位五名が、一年ごとに大臣会議の議長を勤めるという実質的な首相制度がはじまった。この結果、ブータンにおける政治体制では、国王は大臣会議に対して助言のみを行い、直接統治しないという制度となった。

しかし、このような部分的な改革では限界があった。最終的には、成文憲法を制定し、外国からの民主的国家ではないという批判をぬぐう必要があった。

新憲法の制定

このような情勢の下に、二〇〇一年九月、国王は僧侶、国民、司法、政府官僚から選ばれた三九名のメンバーからなる憲法草案委員会を発足させた。その結果、二〇〇五年三月二六日、憲法の草案が国民に示された。それ以降、国民にたいしてこの憲法草案の説明がおこなわれ、三次にわたって条文の修正、加筆が行われた。

二〇〇六年十二月十四日、第四代ジグメ・センゲ・ワンチュック国王が五二歳で退位し、第五代ジグメ・ケサル・ナムギャル・ワンチュック新国王が二六歳で即位した。

そして二〇〇七年八月一日、憲法の最終案が示された。この憲法を仔細に見ることで、ブータンがどのような国を目指しているのかが明らかになるのである。

憲法最終案は、三三条と四つの付表で成り立っている。それでは、この新憲法のおもな点を見ていくことにする。

国王の地位

政府の形態は、民主立憲君主制であると規定している（第二条第二項　以下二・二と記述する）。また国王（Druk Gyalpo）は、国家の元首であり、ブータン国家と国民統合の象徴である（二・一）。それとともにブータンには、精神界はジェ・ケンポという大僧正が、俗界は国王が支配する聖俗二重支配制（Chhoe-sid-nyi）がおこなわれている。しかし憲法はこの制度において、国王の優位性を認めている。すなわち、聖俗二重支配制は、仏教徒である国王に統合され、国王は聖俗二重支配制を支持する（二・二）としている。すなわち国王は、五人の高僧の推薦を受けて、ジェ・ケンポを指名する（三・四）と規定されている。

同時に国王は、ブータンにおける全ての宗教の守護者である（三・二）とされている。これは、ヒンドゥー教徒である国内のネパール系住民への配慮であろう。

国王の継承

現在のワンチュック王家は、一九〇七年、当時インドを支配していたイギリスがヤングハズバンドを武装使節団としチベットに派遣したとき、当時のトンサ地方の領主であったウゲン・ワンチュックがこの使節団に同行しチベット政府との仲介の労をとった。そしてその功績を認められ、そののちイギリスの推挙により、ブータン国王になったという歴史がある。

この憲法においては、ブータン国王の地位は、一九〇七年一二月一七日に即位したウゲン・ワンチュックの正統な子孫に引き継がれるとしているが、国王の継承は、男子優先、長子相続を原則としながらも、男系の長子に欠陥のある場合、国王の指名により女性への相続もありうるとしている（二・三）。またユニークな規定としては、国王は六五歳で退位する（二・六）と規定していることである。

国王の定年制は珍しい規定であるが、この憲法草案によると、ブータン政府の国会議員、最高裁判事など、ほぼすべての政府要職は、六五歳の定年制がしかれている。

また国王はこの憲法に故意に違反したり、長期にわたって精神的に不能となったときには、上下両院合同会議で可決されると退位しなければならない（二・二〇）と、国王の罷免権を議会に与えている。

議会

この憲法での大きな政治的変革は二院制の議会がおこなわれ、政党制が導入されたことである。

議会は、上院と下院で構成される。

上院は、定員二五名で構成される。立法府としての機能の外に、上院は、国家の安全、国家の支配権、国家と国民の利益に関して、国王、首相、下院に対して働きかけを行う（一一・二）。その選出は、全国二〇に分割されているそれぞれの県から選挙で選ばれた一名、国王の指名した五名の卓越した人物（一二・一）で構成される。ただし上院の候補者は、政党に所属してはならない（一一・三）とされている。

下院の議員は、各県の人口に基づいて定められた二人以上七人以下の議員たち五五人で構成される。それぞれの県の下に設けられた小選挙区で一人の下院議員が選ばれ（一二・一）、一〇年に一度、有権者の推移に従って、一つの県に二名以上七名以下の議員が割り当てられる（一二・二）のである。

下院の候補者は政党に所属する（一五・五）。その政党は、つぎのような手続きで選ばれる。下院が五年の任期満了または解散された場合、第一次選挙が行われる（一二・五、六）。この選挙は政党名で行われ、最高得票と第二位の得票を獲得した政党が、候補者を立て選挙を戦う（一二・七）。その結果、下院を構成する議員は、二つのいずれかの政党に所属することになる（一五・五）。下院の議員は、個人としてもグループとしても、他の党に移籍することはできない（一五・一〇）。投票は一八歳以上の有権者で行われる（三・二）。これらの選挙費用の一部は、公費を積み立て選挙委員会が管理する選挙基金でまかなわれる（一六）。

有権者の数はおよそ四〇万人である。

首相の選出

選挙で一位になった政党の党首に対して、国王は首相を命じる（一七・一）。ただし首相は二期までとする（一七・二）。また首相は、議員の中から大臣を指名するが（一七・四）、同じ県から選出された議員を二名以上選んではならない（一二・五）。

総理が二期までというのは、ブータンの近代史の中の出来事と関係している。かつてのブータンには首相制度があった。しかし一九六四年四月、当時のジグメ・ドルジ首相（現国王の祖母の兄にあたる）が暗殺される事件がおこった。この事件の背景は、いまだに明らかにされていないが、首相が大きな権力を持つことを恐れた勢力が暗殺したという説がブータンでは言われている。また昨年までの制度では、議会は一〇名の議員を選挙で選ぶ。この議員は大臣会議を構成し、その投票順位の上位五人が順番に一年間、大臣会議の議長を務める制度を作っていた。このことからも分かるように、ブータンは、一人の人物に権力が集中することがないようにと細心の注意をはらっている。

国王の政治的権限

国王には、一定の政治的権限が与えられている。

まず国王は、軍隊の最高指揮官である（二八・一）。

議会を通過した法案は、国王の承認を得て効力をもつ（一三・一）。しかし一方の院が可決し、他方の院が否決した法案は、発議した院において再度可決された場合は、国王の承認を求めることができる（一三・七）。国王は上院、下院または上下両院合同議会に出席し、意見を述べることができる（一〇・七）。国王はそれぞれの院または双方の院に対して意見書を出すこともできる（一〇・八）。議会を通過しても国王が裁可しない法案は、修正または再考のために上下両院合同会議に送ることになる（一三・一〇）。また国王は、上下両院合同会議で否決された法案であっても、国王の意思によって、国家的重要事項と見なされるか、半数以上の県が異議を申し立てた場合、国民投票を命じることができる（三四・二）とされている。

基本的政策

このような政府のもとで、ブータンはどのような国家を目指しているのであろうか。

大きな特徴のひとつは、環境の保全をうたっていることである。ブータン政府は、王国の自然環境を子孫のために残す。そして国民は自然環境の保全と生物の種の保全を図らなければならない。それには騒音や目に見える物理的汚染を含んでいる（五・一）とし、政府は、国土の自然資源とエコシステムの喪失を防ぐために、国土の六〇パーセントを森林として保全する（五・三）と、憲法で宣言している。

国家政策の基本として、ブータン政府は、国民総幸福（GNH: Gross National Happiness）を成り立たせる諸条件を追求する（九・一）。

国民総幸福とは、第四代ジグメ・センゲ・ワンチュック国王が開発の基本として提唱した考え方である。それは、ブータンの開発が目指すものは、国民総生産（GNP: Gross National Products）の成長ではなくて、国民の幸福と満足度の向上であるという考え方である。この政策は、一九八〇年頃から、広く国民に知られるようになった。

国民の福祉に関しては、一〇年生（日本の学校制度では高校一年生）までの無料教育を保障し、それ以後の職業教育、高等教育は、成績に基づいて公平に受けることができる（九・一六）としている。

また国家は、近代的または伝統的な医薬の公共健康サービスを無料で受けることを保障する（九・二一）とも規定している。

この二つの政策によって、ブータンは福祉国家であると周辺諸国に見なされている。すなわち、ひとたびブータンに居住すると、教育と医療が無料であるという大きな福祉の恩恵を受けることができるということであり、このことが、ネパールからの不法滞在者の増加を生んだ要因の一つでもある。

外国人への警戒

ブータンは外国人の政治参加には、神経質になっている。

公職の候補者の資格は、二五歳以上のブータン国民であること（二三・二）、また外国の諸機関から金銭や便宜を受け取った者は候補者とはなれない（二三・三）としている。またさらにブータン人以外の者と婚姻している者も候補者として欠格となる（二三・四）。

外国人のブータン国籍取得についても、慎重な姿勢を見せている。

ブータン人としての国籍は、両親がブータン人である者は、ブータン人である（六・一）というのは当然の規定である。また一九五八年一二月三一日以前からブータンに居住し、

その名前がブータン政府に公式に登録されている者は、ブータン人とする（六・二）とも規定している。この条項は、長くブータンに居住しているネパール系住民を、ブータン国民として扱うことを意味している。

それに対して、新たにブータン国籍を取得しようとする者は、つぎのような条件を満たさなければならない。それは、少なくとも一五年間ブータンに合法的に居住した者、国の内外で罪を犯し投獄されたことのない者、国語であるゾンカを話し書くことが出来る者、ブータンの文化、習慣、伝統、歴史について十分な知識を持っている者、国王や国家またはブータン国民に対して反逆的な言動または行為が記録されていない者、ブータン政府からの国籍授与によって外国の市民権を自発的に放棄すること、規定にしたがって憲法に対する忠誠を厳粛に宣言した者（六・三）となっている。

これらの規定は、かつてブータンに居住し、現在はネパール国内に難民として収容されている四万人とも一〇万人ともいわれているネパール系住民が、ふたたびブータンに帰国してブータン人となる時には、大きなハードルとなるであろう。

憲法の発布と総選挙

この憲法には、三審制の司法制度、政党に所属しない議員で構成される地方議会についての規定もあるが、これらについてはまた別の機会に紹介することにする。

この憲法は、前文において、発効の年月を明記し、国民の名において発布するという形式をとっている。そして二〇〇八年二月には、この憲法の規定に従って、選挙が行われる予定である。

選挙に関しては、二〇〇七年五月二八日、国民が選挙に慣れるための模擬投票が行われた。投票には電子投票装置が用いられた。

政党に関しては、色々な動きがあったが、現在は、サンゲ・ニドゥップ氏（Lyonpo Sangay Ngedup 元農業大臣　二〇〇五年から一年間首相を勤めた）が率いるブータン統一党（DPT: Druk Phuensum Tshogpa）と、ジグメ・Y・ティンレイ氏（Lyonpo Jigmi Y Thinley　元内務・文化大臣　二〇〇三年から一年間首相を勤めた）の率いる人民民主党（PDP: People's Democratic Party）の二つの政党があり、これ以外の政党の登録がなければ、選挙はこれらの政党で争われることになる。しかしこれの政党のマニフェストは、九月現在、明らかになっていない。

これは余談であるが、現在、大臣会議に属する一〇人の大臣の内七人が政党に参加するために大臣職を辞任した。また議会においては一〇五名の議員の内一〇〇名が政党に参加するために辞職し、議会は解散されたという。その結果、二〇〇七年夏以降、ブータンの政府は開店休業状態であるといわれている。

ブータンのこれから

ブータンにおけるこのような政治の民主化をみると、それは国王指導による民主化であるといえるだろう。ブータンにおいては、とくに先代国王は公正な人としてその人気は非常に高かった。このような政治に対する国王の影響力の強さは、幾度かの政治的危機に国王がその影響力を発揮するタイの民主主義との共通点を指摘する人も多い。

ブータンがこれから経験する民主主義というものは、しょせんは政党に集約された個別利害の調整で成り立つものである。

政治学には「神様が独裁政治を行うことが、理想の政治である」という言葉があるという。いままでは公正な国王のもとで平穏な政治状況にあったブータン国民が、これからは国王の手を離れて、自らの手で個別利害の調整を図ろうとしている。

人口一三億人の中国、一〇億人のインド、二五〇〇万人のネパールに囲まれた人口七〇万人のブータンが、独立と発展を保つ道は、大きな試練の道でもある。

二〇〇八年は、ブータンにとって大きな転換の年となるだろう。

南極ＯＢ会京都支部の創設と記念シンポジウムの報告

西山　孝

一九五七年一月に昭和基地が開設されてから五〇年が過ぎました。これを記念して、昨年から文科省、南極ＯＢ会、南極観測五〇周年記念事業委員会などにより、種々の記念事

業が実施されております。その一環として、昨年の一二月九日に南極ＯＢ会京都支部が、京都周辺に在住の南極ＯＢを中心に設立され、楽友会館で第一回の総会を開催いたしました。

ＡＡＣＫ関係では、第一次隊で、西堀先生、北村さんをはじめとする目覚しい活躍があったことは周知のことであります。その後も、ずいぶん多くの方々が、いろいろな分野で参加、活躍しております。しかし、その数は二〇次を過ぎるころから少なくなっており、もっとも最近では斎藤さん（三九次）になります。

五〇周年を記念して京都支部でも「探検、観測、そしてこれから」と題するシンポジウムが計画され、京都大学百周年記念ホールで、六月三〇日（土）に開催されました。学術会議近畿支部との共催で約三〇〇名の参加者があり、盛会のうちに終わりました。

シンポジウムでは、北村泰一さんが、第一次越冬隊における西堀先生の隠されたリーダーシップについて話され、好評でした。その他、これまで日本の南極観測隊が行ってきた成果がそれぞれの専門的立場から披露され、熱のこもった、わかりやすい講演でした。全体の流れをながめますと、日本の南極観測隊の活動は、昭和基地の建設、極点旅行、ドームふじ基地と展開されていますが、最近では、ルーティン観測が増え、研究成果を急がされる現在の研究者にとって一年半、少なくとも半年を必要とする南極観測は人気のないものとなっています。懇親会の席で、尾池京大総長のスピーチに、南極のこれからの姿が見えてこないことと若者に魅力ある存在とならねばならないとの感想が述べられましたが、この二つは現在の南極観測が直面している最大の難題であります。同時に、これは、学士山岳会が、たびたび討論を重ねながらもぬけだせないでいる袋小路です。

点で始まった南極観測ですが、線になり、さらに面へと広がり、最近では人工衛星から氷山の溶解や移動が追跡可能となり、木星や土星のオーロラの観測もできるようになりました。このような三次元的な観測は、まず、地上観測が原点です。フィールドワークの充実なしには、さらなる進展はありえないと思いますが、これからの姿が具体化してこないのが現実です。

最後に、紙面をとりますが、当日のプログラムを記載しますとつぎのとおりでした。

開会の挨拶
馬越佑吉（大阪大学副学長、日本学術会議会員）
尾池和夫（京都大学総長、日本学術会議連携会員）
「探検から観測へ」
西山　孝（七・一四次隊員、京都大学名誉教授、南極ＯＢ会京都支部支部長）
「だから今日の日本の南極がある」
北村泰一（一・三次隊員、九州大学名誉教授）
「『しらせ』から後継船へ～インフラと共に進展する南極観測」
渡邉研太郎（二二・二四・三五・四〇・四一・四六次隊員、国立極地研究所・教授）
（南極関連ビデオの映写）
「南極大陸の氷を掘る―地球上で最も過酷なドームふじ基地―」
大日方一夫（三五・四四次隊員、医療法人社団真仁会南部郷総合病院・外科部長）
齊藤隆志（三五・四三次隊員、京都大学防災研究所・助教）
「極夜に舞う神秘の光　オーロラ」
藤井良一（二三・二二次隊員、名古屋大学太陽地球環境研究所・教授）
「南極地域の生物たち」
今中忠行（四六次隊員、京都大学大学院工学研究所・教授、日本学術会議会員）
「南極は地球環境を識るところ」
斎藤清明（三九次隊員、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所・教授）

ムラカミさんへのメッセージ

私たちが登山靴や登山・スキー用品でいろいろお世話になった京都ムラカミの村上榮次（隆造）さんが、お店を閉めて東京に移られることになりました。

岩坪五郎さんの呼びかけで有志が集まり、村上さんご夫妻をお招きして二〇〇七年四月一五日、京大会館で送別会を催しました。

全部で一五人のささやかな会でしたが、ご夫妻にはたいへん喜んでいただき、集まった

村上榮次さん・美代子さんご夫妻、送別会にて

ものにもよい思い出となりました。

その際に村上さんあてにお寄せいただいたメッセージのいくつかと、当日の写真をご紹介します。

（横山宏太郎記）

村上隆造様

平井一正

私が参加した京大の二つの遠征、チョゴリザ（七六五四m、一九五八年）、サルトロカンリ（七七四二m、一九六二年）、私が隊長で行った神戸大の三つの遠征、シェルピカンリ（七三八〇m、一九七六年）、クーラカンリ（七五五四m、一九八六年）、ルオニイ峰（六八〇五m、二〇〇三年）のすべてに、村上さんの靴がお供しております。

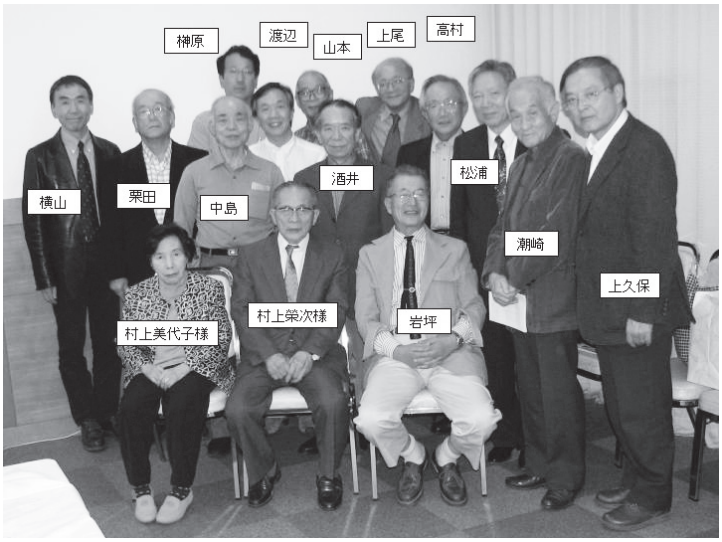
これらの遠征はすべて無事故であり、ルオニイ峰を除いてすべて初登頂に成功しています。これらの成功は、しっかりした靴を作ってくださいました村上さんのおかげであります。事実誰一人凍傷になった者はありません。信頼のおける靴は、成功のためには重要な要素であり、その意味で村上さんの貢献を高く評価しています。本当にありがとうございました。

シェルピカンリからルオニイ峰までは、すべて私が隊長を勤めました神戸大学の隊です。神戸の若い者に村上さんの靴の良さが分かって、これからも村上さんの靴を愛用したいと言っていましたが、このたびお店を閉められるとのことは、本当に残念です。

こちらの要望をよくきいていただいた上で、いろいろと工夫をこらされて作っていただく、このような職人気質の村上さんの靴を愛して五〇年余になります。市販の靴は「心」が入っていないので、履いていても何か不安です。そのような不安を払拭してくれるのが、村上さんの靴でした。

このたび諸般の事情からお店を閉められるとのこと、残念でたまりません。しかし、村上さんはまだまだスキーは一流で、足腰もしっかりしておられるので、どうか今後はのんびりとスキーや山を楽しんで下さい。

奥様ともどもご健康をお祈り申し上げます。



ムラカミさんの引退によせて

能田　成

私にも山スキーに熱中していた時期があった。七〇年代の中ごろのことである。いまにして想えば、それはヤルンカンやK12の無念さを振り払うかのような行為であったのかもしれない。それはまた当時の若者の政治的活動が悲惨な形で終焉した頃でもあった。ベトナムで解放戦線が勝利して万歳と思ったのもつかの間のことで、支援した社会主義国家からベトナムへ

支援代のツケが回ったという話を聞いて驚いたのを憶えている。社会主義も所詮は金次第であることを教えてくれたのである。ありがたいことにそれ以降よけいな幻想を抱かなくなった。山登りとベトナム戦争とはなんの関係もないが、山スキーを回顧するとついその時代を思い出し、またその頃ゴローさんの研究室で計画を練ったり、スキーを引きずる紐の長さを調節したりした、およそ非アカデミックな想い出が甦ってくるのである。

その頃、ムラカミで山スキー兼用靴を作ってもらった。底のビブラムをやや薄くして、靴先を当時流行のビンディングであったジルベレッタにぴったり合わせてもらった。兼用靴とはいえ雪の上でしか使わなかったから、ビブラムも殆ど磨り減ることもなく八〇年代の半ばまで山スキーのときにはこの靴のお世話になった。剣岳を滑ったのも、優美な雪山の見本のようなやま、野伏岳へ行ったのも、その他数え切れないほど多くの山へこの靴で行った。そしてある年のＡＡＣＫ恒例のスキー山行で、井上治郎と一日中靴を取り違えたまま気がつかなかったということも忘れられない。その後はポリバケツのお化けのような靴が山の世界を席巻してしまったため、ムラカミ製兼用靴の出番はなくなってしまった。

何年かまえ北山をワカンで歩こうという会があり、百里が岳へ行ったことがある。北山をポリバケツで闊歩するほど無粋なものはないので、久しぶりにムラカミ靴に登場を願った。このとき北山にしては珍しく低温で、雪もたっぷりあった。一日歩いても靴はどこも濡れることはなく快適そのもの、まだまだ現役であることを主張しているかの如くであった。これは是非ともビブラムを普通の厚さのものに張り替えて、夏山にも使おうと思いながら迂闊にもそのままにしていた。このたび村上さんが店を閉じられると聞いて、しまった、もっと早くに張り替えておくべきであったと思ったが、後の祭りである。でもこの靴はモリヤのピッケルとともにこれからも大切に保存しようと思っている。

目下台湾へ赴任しているために送別会には出席できない。半世紀以上にわたって私たちの山行をささえてくださった村上さんご夫妻に心からありがとう、とお礼のことばをおくります。

二〇〇七年四月七日　台湾　台南市
国立成功大学にて

ムラカミさんの靴と私

横山宏太郎

ムラカミさんといえば登山靴である。しかし私がムラカミさんの登山靴を履くのは一九八〇年、ＪＡＣチョモランマ登山隊の時が初めてである。山岳部現役の頃は、別の、東京の靴屋さんのを履いていた。しかし、装備類ではいろいろお世話になった。当時山スキー用の締め具は、札幌秀岳荘で売っていた、フィットフェルトと同様の前皮式のフロントに、カンダハー式のエビ金とケーブルを組み合わせたものを使っていた。その締め具や、秀岳荘ブランドの山用スキー板の手配をムラカミさんにお願いしていたように思う。

ＪＡＣチョモランマ登山隊には、一九七九年の斎藤Ｙさん隊長の偵察隊から参加する幸運に恵まれた。偵察隊では、かなりの装備類を支給された。靴は、ローバーの二重靴で、よい靴だがちょっと重すぎ、足首が深すぎる感じがした。翌年の本隊には、京大から斎藤Ｙさん、私と同期の甲斐邦男君、私と三人が参加することになった。靴などは自前になったので、ムラカミさんに三人分の高所靴をお願いすることにした。

詳しくは覚えていないが、高所、低温、強風の環境下、凍傷で指を切ったりするのはいやなので、暖かい靴にして欲しいという注文

1985 年、マサ・コン峰で履いた高所靴（横山本文参照）。右端は実験用内靴。

をしたように思う。二重靴で、外靴は裏出し革、内靴の保温材に毛足の長いウールボアを使った。軽くするため、ビブラムを薄く削って貼るといった工夫がされていた。

使った結果は、要望通りたいへん暖かい靴であった。他の隊員は歩き始めてしばらくすると足が冷えてきて困っていたが、私たち三人は逆にしだいに暖まってくるほどだった。問題点は、重さがかなりあったこと、外形が大きく、うまく合うアイゼン（クランポン）が限られることであった。

一九八五年、京大山岳部のブータンヒマラヤ学術登山隊でマサ・コン峰（七二〇〇m）を目指すことになった。高所靴は隊員の好みでムラカミ製かプラスチック靴かを選択したが、ムラカミ製が多数派だった。このときはチョモランマの経験から、保温性はもう少し低くしてもよいので、軽量・コンパクトにすることをお願いした。相談を始めると、いろんなアイディアが示される。なかには専門用語が理解できない場合もあったが、実際のところはお任せしておけば問題なかろうと思っていた。できあがった靴は黒い表革、ウールボアの内靴でずいぶん軽くコンパクトになった。革の厚さ、ボアの毛足など様々な工夫を凝らしてある。期待のとおり、履きやすい靴になっていた。そのおかげもあって、無事マサ・コン峰の初登頂に成功した。このときは実験用として私の足に合わせた別の内靴も作っていただいた。ゴアテックスファブリクスを外側に使い、保温用にフェルトを使ったものである。これも履きやすく、保温性も十分であった。

一九八九年、日中合同梅里雪山峰学術登山隊でも高所靴をお願いした。マサ・コン型を基本に、氷壁登攀の可能性もあるので、靴の中で踵が浮かないようにお願いした。ムラカミさんは内靴内面の立体形状を工夫してこの問題を解決された。これもよい靴だったが、梅里雪山初登頂には至らず、登路の偵察をして撤退した。そのルートを採った一九九〇年の第二次登山隊は残念ながら遭難する。第二次隊を率いた井上治郎さんは私が一回生の時の四回生である。足のサイズが同じで、高所靴をアイゼン付きで貸すことになった。その靴の片方が、遭難から一〇年あまりを経て氷河の中から現れ、今は井上夫人の元にある。

南極用防寒靴の試作もお願いした。標高三八一〇mのドームふじで越冬し、氷床のボーリングをするという計画が一九九〇年頃から始まり、私もお手伝いすることになった。最低気温マイナス九〇℃も予想される環境で、従来の装備で十分か。またムラカミさんに相談した。これまで同様に希望だけ述べて、あとはムラカミさんの知識・技術に頼る。登山靴とオーバーシューをくっつけたような構造になった。ドームふじで越冬中に履いてみた人の話では、快適で暖かく、よかったとの評価であった。さらに改良し正式採用まで持っていけなかったことは残念であった。

チロリアンシューズも作っていただいた。今は三代目を履いている。あたりまえだが、実にぴったりと足にあう。この靴が傷んだらと思うと心配で、四代目を二年前だったか作っていただき、予備として保管している。実はそのとき、高所靴も一足たのんだ。具体的な計画はないが、いつでもいけるようにしておきたかったのだ。これは残念ながら間に合わなかったようである。もし機会があれば、もったいないと思いつつもマサ・コンの靴を使うしかない。

ムラカミさんとのおつきあいでわかったことは、高所靴も、防寒靴も、ムラカミさんの靴は、その知識・技術と創意工夫の結晶ということである。それを履いて登り、歩くことができたのは幸運だった。四〇年近くにわたり、ここに書いたこと以外にもたいへんお世話になってきた。閉店は残念でならないが、健康に留意され、またいつか山談義、スキー談義におつきあい願いたい。長い間、ありがとうございました。

図書紹介

松本徑夫編著、辻和毅・渡部秀樹著

「ヒマラヤの東　崗日嘎布山群―調査と探検史」

櫂歌書房、二〇〇七年発刊

―書評と松本徑夫氏の紹介―

平井一正

一、カンリガルポ山群

東チベットの、ナムチャバルワの東、梅里雪山の西、インド、ミャンマーの国境地帯に

カンリガルポ（崗日嗄布）山群という地域がある。この地域は、ベンガル湾からのモンスーンをまともにうけて、降雪量は多く、チベットでは珍しいカラコルム的氷河が発達している。チベット自治区の重要な観光資源として、近年注目を集めている。

この山群から発するロヒト河はプラマプートラ河にそそぎ、昔からインド―チベットの交易路として開けてきた。多くの探検家がこのルートから当時禁断のチベットに入った。歴史的に非常に興味ある地域であり、探検史をひもとくと必ず登場する。

国境地帯であるので、中国政府はこの地域への入境を長い間厳禁していたが、中印関係の雪解けもあり、二〇〇〇年くらいからトレッキング隊が入境するようになった。

筆者平井は早くからこの地域に目をつけ、一九九六年にはすでにこの地域の最高峰ルオニイ峰（六八〇五m）の登山許可申請を中国登山協会に出している。度重なる不許可の末、遂に二〇〇三年の登山許可を取得し、この山域に入る世界初の登山隊として同峰に挑戦した。神戸大学の隊である。しかし、天候不良のため登頂は断念した。以後この地域に入った登山隊はいない。

登山許可は難しいが、トレッキングの許可は比較的取りやすい。日本山岳会福岡支部は、二〇〇一年から五年間、毎年、松本徑夫を隊長としてこの地域に踏査隊を送り、同山群の山々の同定、命名、地形などをあきらかにしてきた。

そして長年の研究成果をまとめて、表記の題名の本を出版したのである。

二、この本の内容

この本は単なる踏査結果をまとめたものではない。本書を見て驚かされるのは、踏査成果をまとめる他に、同山群に関係する種々の自然、人文、社会科学、探検史などを詳細に記述していることである。研究成果など膨大なデータと種々な文献、貴重な写真などが八〇〇ページ余におよぶ大著にまとめられている。福岡支部創立五〇周年を記念して出版された、世界ではじめて同山群を対象に書かれた本であり、高く評価されている。

内容は多岐にわたる。すなわち、第一部は崗日嗄布山群の全体の詳細、山名の同定、同山群の植物、ほ乳類。魚類、さらにチベット仏教、家屋や橋などの特徴、同山群へのアプローチの方法とその途上のまちの説明、そして福岡支部の踏査経過とここまで熱く燃え立たせた思いとその歴史が書かれている。

特にいままで無名であった多くの山名を地元の人から聞き出し、あたらしく三六座の名前をあきらかにしたこと、そしてそれにともない詳細な地図を作成したことは、大きな成果である。

さらに第二部は同山群を中心とするチベット探検史をまとめたもので、初期のチベット探検からアッサム・インド東北部の探検、インド測量局とパンディット、崗日嗄布山群の探検家たちとその記録、近年の探検、さらに同山群の詳しい探検史、周辺地域の歴史地理、またマクマホンラインをめぐるいきさつなどの考察などがある。

六〇〇〇mを越す未踏峰が林立しているカンリガルポ山群は、地球上残された数少ない未知の世界であり、今後世界の登山・探検家の注目を集めるに違いない。定価八四〇〇円、地図一六〇〇円と少々高価であるが、同地域を志す者にとっては必読の書であろう。

（なお同地域の山名と地図について、本ニュースレター四二号で松本が書いているので、参考にされたい）

三、松本徑夫氏の紹介

ここでこの本の編著者であり、カンリガルポ踏査を精力的に進めてきた松本徑夫氏につ

カンリガルポ山群の最高峰ルオニイ峰（6805 m）

いて簡単に紹介しておく。

氏は二九年二月北九州市に生まれ、九州大理学部地質学科を五二年卒、以後九州大、長崎大学などを経て、山口大学理学部で勤務。現在山口大学名誉教授である。またＡＡＣＫ会員である（一九八九年入会、斎藤、岩坪推薦）。長男は京大探検部員であったが、不幸にも大山で遭難死した。

六四年、九州大で探検部を創設し、多くの後輩を育てた。氏の登山・探検の足跡は、中央アジア、南西諸島、中南米、さらに南極（一六次越冬、やまと山脈旅行隊長）など広範囲に及ぶ。特に中国では、横断山脈、コンロン、天山、シルクロード、長白山などの他、唐古拉山脈、ココシリ山脈など多くの登山や科学調査のリーダを勤めた。特に唐古拉山脈踏査ではグラタンドン（六六二一ｍ）の初登頂に成功している。

カンリガルポ山群の踏査を含めて、三〇年余、本当に席の暖まるひまもないほど世界の未知を目指した活動に目を見張る。実現はならなかったが、ミャンマーの最高峰カカルポラジにも早くから目をつけ、その遠征を計画している。そしてそれがカンリガルポ山群の探検につながっている。

五七年に日本山岳会に入会し、日本山岳会福岡支部長を九六年から四年間勤めた。

松本は書いている。「ＡＡＣＫが考えるパイオニア的な探検が何であるかを学び、学び取った考え方が、その後の登山・探検として結実した。さらにこれを九州大学探検部関係、山の後輩や仲間に伝えようと努力し、多くの遠征を実現してきた。今後、若い人は、時代の流れといわずに初心にかえり、謙虚さをもって、人、山、自然に接してもらいたいと思う」、と。

まさに松本こそ今西錦司の精神を受け継ぎ、それを実行し、その精神を後輩に伝えてきたＡＡＣＫの正統派といえる。そのパイオニアスピリットは若いときから首尾一貫しており、七七歳を越した今も現役でパイオニアワークを実践していることは賞賛に値する。特にＡＡＣＫという強力な組織を利用することなく、ひとり独力で九州を舞台に、遠征の企画から実行、そして報告にいたるまで努力してきた。ＡＡＣＫというぬるま湯につかっていては分からない、多くの困難をのりこえてきた松本の努力と実行力は敬服に値する。

明確な目的を示して、その目標に情熱を傾けるリーダとそれをささえる同じ情熱をもつ何人かの同志が結集すれば、大きな事ができることを、そしてプロジェクトが終わったら、その成果を出版して世に問うことがいかに大事であるかということを、松本の多くの活動から伺い知ることができる。

松本は腰痛を病んでいて、足腰が不自由であり、よくこの状態で度重なる踏査をものにしたと、その体力と精神力に感心する。斗酒辞さずという酒豪であり、一緒に調子をあげると、こちらがつぶれてしまう。話題は豊富で壮大であり、人を惹きつける好漢である。

吉野熙道「サトイモの絵本」（そだてあそぼう 七二）

農文協出版　定価一八九〇円（税込）

小西達夫

サトイモは日本人が最も古い時代から食べ、親しんできたイモの一つです。この本には、サトイモのことを知っているようで知らなかったことが盛りだくさん解説しているので、消化不良をおこしそうです。サトイモは農耕の起源に関わる食べ物の一つで、今でも熱帯地域を中心に伝統的な生活をいとなむ人々の主食であること、ジャガイモ、ヤマイモ、サツマイモなどのイモ類の代表であること、故郷や野生のサトイモのこと、サトイモの仲間のこと、観賞用や祭事用など、育て方から食べ方、楽しみ方まで著者の知りたかったことが楽しい絵とともにまとめられています。子供たちにとっても著者が興味をもったのと同じような気持になって、知りたかったことを、一つ一つ調べ、答えを求めて行く姿を知ることができるでしょう。

「サトイモについて、もっとくわしい解説」には、今日、食育教育についての問題が脚光を浴びていますが、サトイモを通し、農耕や食文化、食の重要性、民俗植物学的、遺伝学

的な立場から解説し、そこには教育の場で広く取り上げなければならない参考になるメッセージが多数あります。特にサトイモの植物遺伝学や民俗植物学の現状での探求しなければならない問題点など、まだまだ未知の研究領域が残され、社会に伝承していくことを主張しています。

著者がなぜサトイモを研究の対象としたかは、著者の紹介、あとがきから想像がつくことでしょう。どちらかというと、植物遺伝学者というよりは登山家か冒険家にみえますが、サトイモとの接点といえば、著者が、サトイモの原産地である地域のネパールからブータン等に何回も訪れていたこと、小麦の研究者木原均博士との出会いと思います。

著者のサトイモの研究は三六年を越えますが、今日でもサトイモを専門とする研究者は僅かです。この本を読み、そだてる面白さ、収穫や食への関心を深めていただきたいと思います。さらにサトイモばかりでなく、いろいろな植物についてもより深く観察し、植物の面白さ、民俗、風習など人間との関わりあいなどに興味を持つように願っています。

おわりに、著者が大病を患った後の今でも、サトイモの研究を続けている中で、この本は完成しました。著者を知る人から見ると吉野氏流の物事を追い求める探究心が滲み出ているといえます。

東京農業大学
（国立科学博物館名誉研究員、
（財）進化生物学研究所主任研究員）

42号の尾瀬の記事の訂正

新井　浩

前田栄三氏より、「私（前田）は尾瀬の（廃棄物処理）訴訟に関して全く関知しておりませんので、以下のように訂正していただきたい」旨の連絡をいただきました。

訂正箇所

一、一五ページ下段三行目、「や前田栄三副会長」を削除。

二、平野太郎さんへの「御礼のメール」六行目、「また、恥ずかしそうに、尾瀬の自然保護問題や、訴訟問題に片棒を担がせて貰ったと語り、」を削除。

正直のところ、長蔵小屋における四代目平野太郎氏との遣り取りや、その後の前田栄三氏との電話から、私なりに理解したままを記したつもりですが、遺憾ながら、私が間違えたようです。今冷静に考えれば、「裁判」は、不正なゴミ廃棄問題について訴追されたわけですので、これを応援したと表現したことは、やはり名誉にかかわることと思われます。

これとは別に尾瀬の自然保護については、世間の動きと同様に支持されているわけで、平野家と親しく交際されているところで、次男桂介氏のＡＡＣＫ入会の労をとられたと理解しています。

とにかく、自然保護運動と、これに反する違反行為＝裁判とをゴッチャにして、応援エールを送ったことは、私の間違いで、情がはしりすぎたせいです。善意の後輩たちの活動に対して、水を差したようになり、まことに申しわけない次第です。

ＡＡＣＫ海外登山・探検助成制度の案内

ＡＡＣＫ事務局　吹田啓一郎

二〇〇六年から始まった会員個人の海外登山や探検的な活動を支援する海外登山・探検助成制度の案内です。応募される方は左記の要領でお申し込み下さい。昨年度は寺島彰会員の「川旅：Sheenjek」が採択され、その成果は既にニューズレターや本年度総会でご報告いただきました。毎年、三月に採択の審査を行います。来年度の計画で応募される方は二〇〇八年二月末までに奮ってご応募ください。

一、申請方法

下記の事項（申請時の予定でよい）を記した会長（上田豊）宛の申請書（Ａ４紙に五枚以内）を作成してください。送り先はＡＡＣＫ事務局長宛に郵送、あるいはＰＤＦを電子メールでお送りください。送り先：〒612-8325　京都市伏見区清水町867-3　吹田啓一郎、または　suita@archi.kyoto-u.

ac.jp

（一）隊または計画の名称

（二）申請会員名と連絡先、Eメール等

（三）隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）：AACK会員外の参加も認めます

（四）対象国・山域・地域

（五）概略のルートと日程

（六）予算

（七）隊の特徴などのアピール（計画の目的・意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）

（八）助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

二、海外登山・探検助成制度　運用規定

第一条　海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、パイオニア的ないしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条　助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条　審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条　助成金額は一件一〇万円を原則とし、年間三〇万円を上限とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条　本規定は二〇〇五年五月一五日の総会の承認を得て施行する。

申し合わせ事項

一　助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。

二　助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はAACKニュースレターならびにホームページに掲載する。

三　一計画につき一申請だけ受け付ける。

会員動向

会員異動

編集後記

「編集なんて集まった原稿の順番を決めて、土倉印刷の天野貴子さんに渡すだけや」と言う前編集長の田中昌二郎さんの言葉を真に受けて、このニュースレターの編集を気軽に引き継いだもののそんなに甘いもんやありませなんだ。八月末の締切りまでに届いた原稿は二本だけ。編集長は己のセンスと情報網を駆使して原稿を依頼することから始めねばならぬことを知ったのはもう九月の半ば。田中さんの応援をいただいて大あわてで原稿を依頼。しかし有難いことに、頼りない編集者を察してかどなたも直ぐに原稿をお送り下さった。本当にAACKの躍如たるところを見せていただいた。会員でない小西達夫さんにも筆を執っていただいた。深謝の限りである。

編集者の色の出せるような誌にするのは今後もおぼつかないがともかく精励致しますのでご協力の程お願いします。

次号は二月発行予定。原稿は一二月末としますので、会員諸氏のご執筆お待ちしております。

（前田　司）

編集委員　前田　司

発行日　二〇〇七年一一月末日

発行所　京都大学学士山岳会

〒六一五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎　気付

製　作　京都市北区小山西花池町一―八

（株）土倉事務所